

聖書：使徒言行録7:54-8:1

讃美歌：494（1, 2節）

1. 前回のおさらい

- *初代教会史におけるパウロの位置づけ → 最大の伝道者
- *キリスト教「教義」の形成に関するパウロの影響
- *世界宗教としてのキリスト教 → その土台を作ったのはパウロ

2. 新約時代の宗教的状況（ユダヤ教）

- *狭義（ユダヤ教）＝バビロン捕囚以後 広義（古代イスラエル宗教）＝アブラハム以来
- *「選ばれた民・イスラエル」→ヤハウェへの従順を誓う ↔ 神の祝福
↑ このことを信じる信仰体系＝古代イスラエル宗教、ユダヤ教

3. ユダヤ教を理解するポイント

- ①「選民」 アブラハムの選び、エジプトの奴隷からの解放
- ②「契約」 周囲＝神々の信仰の中で、唯一の神・ヤハウェへの信仰を誓う
→ ヤハウェへの従順を何で測るか？ → 儀式（礼拝）と律法（戒律）
- ③「苦難の中における信仰」 バビロン捕囚、それ以降の諸勢力による支配
「この苦難には何の意味が？」→ たどり着いたのが「メシヤへの期待」④

4. 新約時代のパレスチナとイエスの登場

- *宗主国＝ローマ帝国 地中海沿岸を覆う大帝国 その支配下にユダヤ王国（ヘロデの治世）
- *ナザレのイエスの宗教活動 「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」
「神の国の到来」「悔い改め」＝イエスの宣教の中心（病人の癒し） 当時の宗教状況の中で極めてユニーク
- *「この人こそ、神が約束されたメシヤ・救い主だ！」と信じる人々＝クリスチャン キリスト教の始まり
→ ユダヤ教においては？「メシヤはまだ来ていない」
- *イエスの宣教の何がユニークだったのか？ → それを知るためにはまずユダヤ教の状況を...

5. 当時のユダヤ教の宗教的状況

- *律法主義の時代 「選民にふさわしい生き方」＝律法への忠実・従順
- *律法学者・ファリサイ派 ← 民衆に律法を教え導く役割
- *成文律法に加え、膨大な量の解釈集（タルムード）
- *教え導く役割から、監視し処罰する役割へ... → 宗教（信仰）が、むしろ人々を圧迫・束縛

6. イエスの宣教のユニークさ

- *律法からの自由 形だけの従順よりも「互いに愛し合う」ことの大切さ
- *「選民・イスラエル」という民族の枠を超え、男女・職業の序列も超えて「すべての人間は神の国へ」
- *次第に律法学者・ファリサイ派（＝宗教エリート）と対立するように...
- *ユダヤ教指導者 → ローマ帝国の力を借りて、イエスの処刑を企む → 十字架

7. パウロの経歴（クリスチャンになる以前）

- *元ファリサイ派の律法学者 イエスの処刑を企んだ宗教エリートの一員
- *「熱心な教会の迫害者」フィリピ2:5-6（P.364） ファーストコンタクトは「敵対的」
- *ステファノ殺害の「首謀者」?? 使徒言行録7:54-8:1 9:1-2
- *そんなパウロが、なぜキリスト教最大の伝道者となっていたか？ → 次回

次回は12月2日(水)です。